説教20210530 ヨハネの黙示録4:1-11 ヨハネ福音書6:12-15

「主を誉め　たたえよう」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

人のこの地上での生涯ははかないものです。それは、定規で図るようにその年数を数えることもできるでしょう。ある人は100歳でその生涯を終え、又ある人は50才で地上での生涯を終えられます。信じる者には地上生涯の次にくる場所が与えられますが、信じないものには与えられません。

この世では、自分が死んだら全ておしまい、という風に考えておられる方もおられます。そういう方も多いのではないでしょうか。そのような考え方は、えてして、寿命が長ければ幸せ、短ければ不幸せ、というような紋切型の発想に、私たちを導くことでしょう。現に、そんな風に私たちは思わされているところがあります。３０年前はそのような風潮は今よりもっとひどくて、長く生きることすなわち、幸せな人生だ、という思いに支配されていたように思います。しかし、今やそのような思いにもほころびが生じてきているようです。

神様からの愛を知り、周りの人を愛することができるようにされた人にとっては、増し加えられていく１日１日は、幸せの日々でありますが、反対に、何かにおびえ、朝日がさしてくることにさえ、嫌気を催す人にとっては与えられる１日１日は拷問の日々に他ならないでしょう。

このように、それぞれの人が抱いている心象風景は、人それぞれでありまして、外からのぞくことが出来るのも、ほんの一部分にすぎません。客観的にみれば、死の谷の影ばかりを歩んだ人生だったと思われるような人の一生も、当の本人からしてみれば、全く逆で、日々が神様に用いられる、充実の一生だった、ということも往々にしてあり得ることでしょう。

ですから、私たちはこの世的に、定規で測るように、人や自分の一生を考えていくことには、もっと慎重になったほうがよいでしょう。定規で測るように人の一生を評することが出来るというのは、私たちの思い込みに過ぎないのかも知れません。ましてや、今の世は、人生設計などという言葉で、自分で自分の一生を計画するような時代ですから、神様の目から見れば、随分と嘆かわしいことが、この地上では行われていることと思われます。私たちはこの世で日々聞かされ目にする「人生設計」といった言葉一つ一つに強く影響され、その言葉を知らず知らずのうちに自らのうちに取り込んで、自分の行動原理の一つとすることでしょう。「人生設計」というのは保険会社が言い広めた言葉らしいですが、この用語には見事に主語が欠けています。果たして自分の人生を設計するのは誰なのかと、保険会社に問えば、それはほかならぬあなたご自身ですよ、と自信たっぷりにお答えになるさまが思い浮かびますが、神の御心を知っている私たちはそれが嘘であることを承知していることでしょう。

さて、今日の説教題に入りますが、「主を誉め　たたえよう」とあります。私たちはこれを読むとき「主を誉め　たたえよう」という風に主語をさす「を」を強調して読みたいと思います。「主こそを誉め　たたえよう」ということです。

私たちはこの世にあっては保険会社などの幅広い宣伝によって、「自分を誉め　たたえよう」「自分こそを誉め　たたえよう」という風潮に染められています。それをもう少し婉曲にして「自分たちをこそ誉め　たたえよう」という風に、自分たちという複数形の話、例えば自分たち家族ですとか、自分たちの会社というように表現するときもありますが、その中心に自分を置くとき、それは自分の話と大した違いはないで在りましょう。

自分ではなく主をほめたたえる、ということは、私たちの信仰の根本に関わる大事なことであります。そんなことは言われないでも分かっていますと言われる方も多いかと思いますが、実は、私を含め全ての人間はこの、自分をほめたたえることと、主をほめたたえることの間で迷い戸惑っているのです。例えば、私たちは知らず知らずのうちに、私たちの教会を心からほめたたえてはいないでしょうか。私たちが頑張って建てた教会をほめたたえてはいないでしょうか。しかし、この教会というのは、始まりから終わりまで主のものであり、あなたである主なる神のものであります。それでもこの教会が私たちのものでもあるのは、私たちが、教会の体、すなわち主イエス・キリストの一部分であるからなのです。

ですから私たちは毎週心して、自分ではなく「主こそを誉め　たたえよう」と自分に課していくことが必要でありましょう。

私たちは、この世での地上生涯を終えるに当たって、出来るだけ、自分をなくし、主イエスキリストの一部分になっていないと、この世を去る辛さとということがかさんでくるのではないでしょうか。「人生設計」といううたい文句にのって、自分という、はかなくて不完全な存在に全てを掛けてしまうのは、大変危険な投資です。私たちは、実は主イエスキリストに掛けて、全てをキリストにゆだねるほうが安全です。

今日のヨハネ福音書の16章13節に「その方は、自分から語るのではなく」と記されています。その方というのは聖霊の神のことですが、その方は自分から語るのではなく、聞いたことを語る、と書いてあります。これは実は大変大事なことをイエス様は言っていると思います。「自分から語るのではなく、聞いたことを語る」ということは独創性といったことが評価されがちな今の世においては、なんかピント来ないというか、聞き流してしまうような言葉であります。しかし、私たちが真理を悟っていく上でこれほど重要なことはないでしょう。例えば、連絡網で、「明日は朝6時に集合してください」というメッセージが伝達されたとします。ある自意識過剰で、自分中心にものを考える人がこれを受け取り、次に伝える時、「明日は朝6時に集合してください、ということですがそんなに早くなくてもいいのにね」というような余計な一言を付け加えてしまう場合もあるかもしれません。

この人はこのように余計なことを自分から語ってしまうのですが、真実が伝わっていくには、私たちは、聞いたことを忠実に、そのまま次に語っていかなければならないのです。

イエス様はこのようにありふれた現実の世界に潜んでいる、真理を事細かに見ておられ、私たちに忠告をされているのです。

私たちは自意識過剰や自分を中心にもの見ることをやめなければ、なかなか自分をなくして、主イエスキリストに全てをゆだねていくということは出来ないでしょう。

それからイエス様は不思議なことを言われています。15節「父が持っておられるものはすべて、わたしのものである。」イエス様は父なる神の一人子でありますから、父なる神の遺産は全て子であるイエス様のものである、と分かりやすく解釈することも出来るでしょう。しかしここで言われているのはそれだけではないように思われます。すなわち次のようなことも意味しているのではないでしょうか。父が持っておらるものは、又子のものでもある。したがって、父一人だけでも、又子一人だけでも、それを勝手に使ったり処分することは出来ない、ということです。昔は日本でも家制度が確立していて、家屋敷や調度品に至るまで、それらは個人のものではなく、先祖代々の家の所有物だという観念が生きておりました。今でも残っているかも知れませんが、だんだんとそういう観念はすたれてきている様であります。ですから今は自分のものは自分だけのものというのが常識ですが、そんな考えが全くなかった時代もあったのです。聖書の時代の常識がどんなのかはなかなか分からないのですが、とにかくイエス様は、父と子と、そして聖霊の神が共有している持ち物というものを考えておられるように思います。

このように自分だけの持ち物を捨てていくということも、又自分をなくしていくことの具体的な表れでありましょう。

今日のヨハネの黙示録に書かれている世界は、いよいよ世の終わり、全てが完成する終末の時がやってくるちょっと前のことが書かれています。そこにはきらびやかなもの、へきぎょくや赤めのうといった宝石類がちりばめられ、又、エメラルドや水晶のように光る憧れの情景が眼前に広がっています。

そして、今この地上生涯を歩む私たちも、地上を去った後にその場に入れられていることでしょう。しかし、地上を去るに当たって、私たちは自分だけの持ち物というのは持ち出すことは出来ないでしょう。俗な言い方を借りれば「お金はあの世に持って」はいけないのです。ですから私たちは、この地上を去るにあたっては、出来るだけ自分だけの持ち物を少なくして、それを個人といったレベルを超えた共有の財産へと移し替えていくことが大切かも知れません。

ヨハネの黙示録では、全てのものは神のものであり、又同時に私たちのものの様であり、ます。そこには神と人とが、すぐ近くにいる親密な関係となって、共に住んでいる世界があります。私たちは、神からの愛を受けるということは、具体的には、まじかに親密な主イエスがいて、いつも彼から祝福と励ましと慰めを受けているということです。そうしますと自ずと、自分というものはなくなっていくものです。自意識過剰や自分を中心に考えてしまう事の辛さから解き放たれて行くことであります。

このことが、よく言われます、信仰のみという事の具体的な有様で在ります。私たちは自分の頑張りや、計画や、考えによって、このヨハネの黙示録に記されています終末の完成の時に招かれることは出来ないのです。

では、どうすれば、自分をなくして、イエス様に全てをゆだねて行くことが出来るのでしょうか。なんだか堂々巡りのような気にもさせられますが、そこから救ってくれるのも又信仰であります。

結論から言ってしまえば、心から主を誉めたたえていることが、主イエスに全てをゆだねて、主の平和のうちに憩い、主にあって喜んでいることであります。ですが、実際問題、私たちはこの世で、様々な雑音によって心から主を誉めたたえられない時もあるでしょう。そういった葛藤は、詩編を口ずさんで生きてきた代々の聖書の民にとっても同じことでした。詩編の最後、150ペンを読みますと、「太鼓に合わせて踊りながら神を賛美せよ。弦をかき鳴らし笛を吹いて神を賛美せよ。シンバルを鳴らし神を賛美せよ。シンバルを響かせて神を賛美せよ。」という風に賛美の姿の完成系が、心置きなくあらわされています。しかしそこに至るまでの詩編には、実際の迫害、恨み、妬み、悲しみ、そして神の知恵、救い、憐れみと許し、慰め、そして神への感謝と、様々な過程と、レッスンとが記されているのです。つまり、私たちは、心から主をほめたたえることが出来るようになるため、主イエスの救いの道を、折がよくても悪くても、賛美の歌を歌い続けて歩んで行くということでしょう。私たちの全てを知り導いていて下さる主イエスを信じて、この一週間もその賛美の歩みを続けてまいりましょう。

いのります

憐れみ深い父なる神

私たちはこの地上で、試練と苦難を与えられてあえぎ苦しんでいます。どうかそのような私たちを助けてください。

そして、この地を去るときには、あなたに心からの感謝と賛美を捧げることが出来るように私たちを変えてください。

今、5日前にあなたに召された猪股修兄を覚えます。この兄弟が、あなたから試練と恵みを受けて、多くの隣人を愛する人生をまっとうし、今、あなたのみそばで守られ安らっていることを覚え、あなたに感謝と賛美を捧げます。

地を去った兄弟姉妹、そしてこの地に今なおある私たちの主なる神よ、どうか、これからも私たちが全ての人たちとの親しき聖霊の交わりを保ち、ついにみくにの完成の時を迎えることができますよう、私たちをあなたの恵みによって最後まで導いてください。

父と聖霊と共に一体